

「戦いすんで……」

寺田閑一

雑役のなかでも、一番汚い、一番いやな作業だけが、後任者のないままに、今日までやってきたが、後が決ったのか、それも今朝、最後の予告を口頭で受けた。その最後の四人が、昼飯に上ってきた。最盛期に建てた、この三階建の下請ハウスも、今はほとんどが空室で、ロッカーだけが、ありし日を偲ばすように、ギッシリ立っている。ガランとした食堂のそこそこ、本当の片隅で、四人だけが、ボソボソと、弁当を食っている。

ガタのお澄は、便所の掃除屋である。たりふりは女でも、芯は男、力は有る。長い水道のホースをひっぱって、嫌な顔も見せず、汚い便所をゴシゴシみがきたてる。奇麗好きで人氣もよい。見かけによらぬ利かん気で、ない

横文字が読める。

現場と本社の、書面や図面の送達をやって居るが、外国の注文船になると、英語が入るので、珍重がられる。信用のいる仕事やで、は本人の自願自願。パッとせん、風体で、現場と本社間を、ボロの自転車で、漕きまわっている。

ギウヤンは、うしのギウである。くらやみの牛、どん柄が大きくて、ノッソリ型。力があるので、足場板の整備や、丸太の養生を一人でコツコツやっている。

相澤のいる仕事だが、本人のたつての希望もあって、一人でやっている。温知しうだが、一面、ハットする目つきを見せることがある。

「ほんまにかんのたつ。わてらもう五年やで、それがどや、こんなバラベラの純一枚で、バイバイやて」お澄が甲高い声をあげた。もうどんな高い声を出しても、どんな内容のはなしをしても、遠慮も気兼ねもいるもんかい。四人ともそんな心境らしい。

「いっぺんおやじめ、ガチンとくらわしてやりたいなア」

ピコがのった。

「釜の四人で、ストでも打つか」

労組事務所でのききかじりで、興一昂然と胸を張りよつ

しよだが、傷害の前科がある。

ピコ、高山彦太郎。二言目には、草奔の徴臣、高山彦九郎の曾孫だとエバル。誰も信用はしていない。

東京の三条の街の上、はるかに皇居を……馬鹿の一つおぼえ、之がでると、キスもうれてるしょう。後はなみだとよだれで、苦茶苦茶。厚生課の洗工場雑役で、たまにポケットから出る銀貨や、札が唯一の楽しみ。

ハッケヨイヤの興一、に言わすと、高山彦九郎は一生不犯。はんのないのに、何で息子や、孫があると、笑う。その興一、ハッケヨイヤと言うが、算木や、笹竹いじりの八掛見ではない。興一、こいうやろが。うーんそやそや。興一、あーやろが、うーん、その通り。つまり、どっちでも、八掛いよやの興一である。興一、学があつて

た。

「ストぶって、どないするねん。ピラまいて、四人でデモするのあん」

お澄が又の喬体で、煙草に火をつけた。

「ストなんて、チョロイ、チョロイ。ハンストでいこ、ハンストで」

ピコ一人で、気おいたちよった。

「ハンストで？ どないするねん」

おやじめ、ボツンと聞いた。

「おやじの自宅へ、へたりこんで、断食の。これでいこ、これで」ピコ一人におしまくられた。

「断食で……。うどんも、ラーメンもいかなのん」

眉をよせて、お澄が聞いた。

「そらそーや、水お茶以外は絶対にだめ！」

ピコが力説した。

「しかしなア。一日二日はつらいらしいが、それから先は、フンワカフンワカやて、それに方法があるねん。手首をチュウチュウ吸うてたら、毛穴から血がでる、これで結構、十日はもつ」張や収やあるまいし、人間が人間の血が吸えるかい。断食は別として、おやじの宅への座り込むのは、一番効果があるようだ。

昼からずつと、現場へ出ず座りつづけで、話がまとまったのが四時。兎に角四人の通知書をもって、事務所へいった。おやじと会計とが、

むつかしい顔で、算盤をはじいていよった。

「解雇でも、解散でもエエがな。五年七年と働いて来たんや、分に応じて、出すもんだしたれよ」

ピコが、思い切つて、口火をきりよった。

おやじ奴、ボカンとしよったが、直ぐにへんざ口で。

「釜の兄い、ストの真似かい。けっこうなこっちゃ。

こちや、借金のことわりと、金の工面で、四苦八苦じや。どや、馴くりでもかしたれよ」

おやじの貫録で、逆襲ときた。
「ここがお忙しいのなら、御本宅の方へでも伺いまっせ」

ここにらしく、興一がやり返しよった。

「あのなア、会社が一文も出さんのに、何で下請がだせる。氣に入らんのなら、会社へいかんかい。エラさんにピンタの一つもくらわさんけエ、一寸は物の判りもようなるぜ」

うまいこと、おだてくさる。この甘口につて、イチビルト、堺か、都島の零番地へ、ウタタ寝にいく羽目になる。

「会社なんて、こちや知るかい。ここで雇うてたんなら、ここで話をつけたらんかいな」

牛やん珍らしく、ねっちリドスを利しよった。

とらと、太刀打できるタマやない。

そこで倉皇と引下つて、表門の占疊の上へ、馴をすえた。

「案ずるにやなア、四五日は、腹をすえときや」

興一は徹夜を予想してか、着ぶくれで、細い身体が倍に見えた。

ピコやんが、隣りの空地から、折たたみの段ボールの古箱を拾つて来て、座布団代りに、石疊の上に敷きつめた。余りの分を、屏風代りの風除けに、立てまわした。

いやでも人目につく。そこがピコやんの狙いらしい。往來の人が、嫌でもジロジロ見て通る。四月の風は未だつめたい。

「嘘やわ……、こんなん、わて……」

お澄が一番に音をあげよった。

「阿呆！未だ序の口や」

興一が、小声で叱りつけた。

「きばらしに、一丁御開帳するか」

ピコがふところから、花札を出しよった。

「それぞれ」

お澄が腰をずらし、場をつくった。

近所の子供が、大人の札遊びを、珍らしそうに見によってくる。お澄が氣にして、手を振るが、仲々うごきそ

「まあ、どうともせんかい。こちや百円のせぜでもないわい」

おやじ、腰をすえて、うそぶきよった。

「ここで話がかんのなら、お宅の方へ行きまっせ」

興一が言う、サット、顔色を変へよった。効果ありや。それでも。

「どうぞどうぞ。むさいとこやが、いつでもきてや」
会計と、目と目で話すと、そそくさと出ていきよった。さっそくおやじの宅を電話帳でくった。

翌朝、阪堺線の東港駅前、線路沿いで石津川より、かど引きまわした、しょうしやな宅が見つかった。一方は人家、一方は石津川までの広い畑地と野原。八時に駅で落合つて、四人はおやじの宅の門前に立った。

ピコがさっそく、声色入りで案内を乞うた。何の応えもない。しかたがないので、勝手口へ回った。インターホンに口を当てて、案内を乞うと、こっちは女の声で、直ぐに返事がでた。御主人に御目にかかり度いと申入れと、折返し落付いた、別の女の声で、主人は只今は不在、会社の事は、妾では伺いかねる。主人は金策に出掛けましたので、帰宅の程は不明。お待ちくださるのは御自由ですが、留守居は女子ばかりなので、宅内へのお入りは堅く御断り。応待の要約、言葉の簡潔。しよせんこち

うもない。がそのも、直ぐに親達に引立てられて、散つていった。

今度は近所の親共が、半ば好奇心で、半ば不安で、遠くから目の端で、捕えるように眺めている。

昼前に勝手口がいて、茶瓶と茶碗が、数だけ揃えて、盆の前に並べてあった。

「お茶うけぐらいは出すもんや。買うてきて」

お澄が虫のエエ事をわめきよる。

「ハンストハンストや。水とお茶以外はアカンアカン」
ピコが札を打ち打ちたしなめた。

五時頃、誰が知らせたか、ボリが二人やって来た。うさんくさげに、一同を眺めて。

「オイ！君らはそこで、何をしとーる」

「花合せをやつて、ま……す……」

興一は手もやすめずに言った。

「モヤ一本も賭けてえしまへんで。こっちや首なし人間だす。金もなければ、死にたくもなし……。そやそや旦那一本おくなけれ」

若いボリが波々煙草を手渡した。

「大けに……」

ピコやん、素早く両耳に一本宛をはさんで、一本を口にくわえた。返す途中で、興一の手がのびた。三本減つて、

つきに回る。

「アーラー、もうあへん」

お澄は最後の一本を口にくぐると、空の袋を握り潰した。キウヤン、煙草はお好みでないらしい。

「この家の人は、承知してはるのんか」

年かさのボリが聞いた。

「へエ……、外でお待ちやすやて、お茶までよばれてますんで……わてら」

お澄が精いっぱいの調態で答えた。

「くびになったんで、それで交渉に来てますねん」

たたみかけるように、興一がおつかふせた。不審相にボリ連、四人を尻目にかけて、勝手口から中へ消えよった。

札にもうんだ。話の種もつきた。何時の間にか、日がくれた。芯が疲れた。一人二人が横になった。薪が聞えてきた。

翌朝、一番電車で目がさめた。

「腹が減ったなァ……」

断食を言出したビコが大声を上げた。

太陽が上っても、今朝はお茶は出なんだ。線路越しの紡績工場の水道で、顔を洗って、茶瓶一杯に水を張ってきた。流石に腹がへって、身体を動かすのが億劫になって、門に寄りかかって、煙の羽根車の単調な動きを目で

追って刻をすごした。

「未だお帰りやおまへんか、外から電話でもありまへんか」

興一がいらいらして、度々、ききにいった。

賢夫人、少しもさわがず。さわやかにおっしゃった。

「帰りましたら、一番にお知らせします。当方も門前で、さようことでは、外聞も悪う御座いますので。はい」

取りつく島もない。

「テヘ……」

頭をかかえて、興一退散である。午後になると、ビコがブラリと出掛よった。追うようにして、牛やんだけを残して、お澄も興一もつれだって座を立った。やがて三人は、牛やんの視線をさけるように、帰ってきた。何かを運へ入れて来た気配。きいた答の煙草まで、吸うていよった。二日目の晩、テレビに顔耳をたてて、夜をすごす。興一とビコは遅くに、酒気もブンブンさして帰ってきた。ハンストなんて尻くらえか！電車の客が、こちとらを見る為に、窓に鈴なりで見て通りよる。三日目の朝が明けた。

「どないやねん」

この間の若いボリが、中年の男を一人連れてきた。牛や

んが応待に起きた。

「ホー、○○の警備係……て、刑事さんだっか」

牛やん、皆に名刺をまわした。

「ストを、やってんわんで」

刑事は一同を、穴のあくほど、みつめよった。

「刑事さんやったら、ここのおやじを、しよっぴいてきて、わてらと逢わしとくたはれ」

刑事は囁きのお澄を目を丸くして見入った。

「それ出来んなァ。それよりここで無駄するより、職

安か、基準局で話をせんかい」

吐きだすように、言いよった。

「まー、おやじに逢うまで、待ちまっさ」

こつちもふてくさった。刑事は例のように、勝手口から宅へ入りよった。一時間おして、でてきよったが、みむきもせずに帰しよった。その日も、おやじからは音沙汰なし。御見物衆の数は、日ごとにふえる。お澄は未だしも、興一とビコのうるさいこと、ハンストの警察者が、愚痴ること、愚痴ること。食べに出たいにも、金がないらしい。お澄もチョコボチョコボ。牛やんが立上って、どこかにいった。相当水い時間のおと、片手に紙袋をかかえて帰ってきた。中身はパンとジュース、煙草まであった。手渡す牛やんの手くびに、自慢のローレックスの時計が、

消えていた。

一瞬、皆の元気がよみがえった。久しぶりで花を引く元気も出た。その青嵐の迫るころ、かどひきまわした掛のかけから、女の声がした。身近なお澄が、立よった。

「あのな、そんなら、そこで何時まで待ってもあかんで……」

声を秘めて、言うてくれた。

「この大將はな。通天閣の通りすちに、房太郎、言う飲み屋があるわん。そこが二号さんの家や、そこにいてはるわ。いつてみい……」

女の声はそこで切れた。広い世界や、仏もある。

「いくか」

お澄が聞いた。

「いくいく、いかいがかいな」

皆が期せずしてはづんだ。素早く、とはいきかねた。三日も座りづめが耐へて、腰が立たん、足をひきひき電車にのって、恵美須町の終点で降りた。五つの辻へ、それぞれが散った。興一がいち早く見付たらしい。おいでおいでとさしまねいた。思ったより立派な店であった。お澄が肉をのぞいたか、おやじの姿はたい。二階から女が銚子を取りに降りてきた。

「式階や、式階や」

お澄が一寸身を引いて、皆さそい入れた。一斉に土足で、ドヤドヤとかけあがった。あけっ放しの部屋で、テカテカ輝いた光らして、おやじの御機嫌の顔が見えた。

「驚い何が金の工面じやい。何が借金の断りじや。こっちや三日三晩、飲まず、睡らずで、おのれの家の、石畳の上で、待ってたんじやい」

興一がせきをきったように、まくしたてた。

「この極道たれめ！」

口より先に手が動いた。お澄はかたわらの三味線で、ガツンと、おやじにくらわした。

「痛い……」

三味線の俥が折れて、胴が飛んだ。

「あかん、無茶をしたら、無茶をしたら」

牛やんが、お澄をかかえるように、とめにかかった。ピコと興一の二人はじんだる踏んで、飛まわっているだけ。下から人が上ってきて、仲へ割って入った。ポリが飛んで来て、四人にワッパをかけよった。因果と警察署は目と鼻の光。ウーも、スーもない速さで豚箱入り、其の夜は簡単な調で済んだ。

共犯とあつて、箱は別々だったが、毛布があつて枕もある、三日振りで、グッスリ寝た。翌朝、飯が喰えた。こちとらの調はいたって簡単。もっと言わせて、ほし

お澄は未だ続きを考えてるらしい。

「結局、ハイ両テブ（貳百五十円）にもならんがな」

どれも浮かん顔が、並んだ。

「お前のハジストで、のつつぱりにもならんだかア」

「ア」

牛やんが、ジロリとピコを目で責めた。凄じい目だ。

「ラーメンが、喰べたい」

ピコは、お澄の時計に目をよせよった。気付いたお澄は、慌々時計を外して、ピコに渡した。

「仕しとア」

ピコはすつとんだ。三人は職安前の歩道と、車道の段差に腰を落とした。物を言うのも、大儀らしいかった。相当の時間がたった。

「しもしたア貴いものさきめ、トンヅラやで」

お澄が血相をかえて、飛出した。

「待ち！お澄、待ちて、待ちて、お澄ちゃん」

今度は、興一が頭の頂点から声を出して、追いかけた。

「へエ……、八掛もお澄を頂いて、けつかったんかいカ」

牛やん、やつと間をおいて、立上った。

辺りをジロリと見回した。上衣のボタンを外した。腹巻から、可成り分の厚い札束を出した、二十万より少

かった。何故か隣の箱の、牛やんが出たり、入ったりしなかった。午後の四時頃、一同が引出された。

取調室へ入れられて、エラさんから、タコを釣られた。「何がストじゃ。法廷どおりの処置をうけてて、何がストじゃ。おまけ暴力沙汰まで、起しくさって、本来なら立件して、刑務所送りやが、社長も反省するところがある言うてはる、今度だけは不問にする、が次はあかんぞ！」

頭の上、叱言が飛んでいきよった。それより早う、熱いうどんか、そばが食い度い。一杯飲めたら、なおけっこうや。恵美須警察署の、表階段がいやに高いと思えた。

「三針も縫いよったて」

誰から聞いたか、牛やんが呟いた。

「だまー、みされや」

はげたでもないで、どっつけたか、お澄の頬が赤く張れあがっていた。

「戦いすんで……日かくれてーか」

ピコが気取ってみよった。

「どないすんねんな」

あれー、で喉をこすったように、お澄は地声を出しよった。

「こいで、済んだんかーエイー」

からず、三十万より多からず、と言ったとこか、一寸目ではめて、改めて、腹巻へもどした。尻のポケットから、時計を引出て、手首にまいた。

「トルコへで、行っか」

牛やん阿倍野の繁華街に足を向けた。

四車線と、広い人道を取った、この道路の正面に、今日の残陽が落ちる。紅団々、釜ヶ崎を一時、茜色に染めた。それも束の間夕の気配が取ってかわったように、うす薄から、濃い夕陽に染め直すよう、つつんでいった。

終り